

井筒俊彦著「意識と本質 - 精神的東洋を求めて」岩波文庫 1991年8月8日刊を読む

## 対話と非対話

1. 事実、禅本来の観点から言いますと、普通の意味での対話、あるいはついさっき申しました言語による思想感情の水平的コミュニケーションは全て第二義的なものにすぎません。
2. 勿論、人間の一般的社会生活、人間の社会的存在にとっては、思想感情の水平的コミュニケーションは欠くことのできない大切なものではあります、禅に言わせればそれよりもはるかに重要な問題、人間実存そのものの存否をかけた大問題があるのです。
3. その大問題は人間の自覚という一事であります。
4. そして人間の自覚は、本論の主題をめぐるコンテクストにおきましては、人間が自己を「無言」の言語化として悟るということを描いてはあり得ないのです。
5. 人間実存の中核に関わるこの問題が解決されない限り、水平的対話——2人の個人の間での対話であれ、2つの異文化の間での対話であれ——にかかずらうことは、禅の観点からすれば、全く無意味なのであります。

P407

## [コメント]

「自覚」とは何かを禅の立場で考える上で、本書ほど示唆に富む著作はない。

- 2009年1月13日林明夫記 -